

悦ちゃんは七十一歳

成平なりひら 一平いちへい太た

私の名前は若林わかばやしあやね彩音、今年の春に十四歳の誕生日を迎えたばかりのミツシヨンスクールの二年生。父と母と三つ年上の姉、そして悦子ばあばとの賑やかな五人家族。この時点では、悦ちゃんのことを悦子ばあばと呼んでいた。当然の如く、お祖父ちゃんもおばあちゃんもそれぞれ二人いるからである。

悦子ばあばは、一人っ子だったお母さんのお母さん。つまり母方の祖母。七年前にお祖父ちゃんが他界し、「独りじゃあ心配だから」と、父の提案で同居することに。

同居といっても、悦子ばあばを呼び寄せたのではなく、私たちが父の東京本社転勤に伴い転がり込んだといった方が正解なのかもしれない。

父の仕事は、大手薬品メーカーの研究員。母とは社内結婚。大学院を出てK薬品の研究室に入って十五年、部長に昇進するとともに東京本社勤務の辞令が。お祖父ちゃんが他界して半年たった時だった。とりあえず

父だけが悦子ばあばん家に越して、夏休みに入ると同時に私たちも後を追いかけるように引つ越した。五人家族の誕生。これまでの狭い社宅生活とは違い、悦ちゃん家は世田谷の深沢、大きな家が多い地域。悦ちゃん家も負けてはいない。お祖父ちゃんは貿易会社の社長さんだった。

他界する三年前に、父と母を交えてじっくり話し合った結果、父は今の仕事を選んだ。結果としてお祖父ちゃんは、会社を手放し悦子ばあばと二人、飛鳥トビで百日以上かけての世界一周のクルーズ。帰国と同時に、山のようなお土産を持って私たちが住む信州の社宅に。まさに「ドサツ」という感じだった。そしてそのまま近くの温泉に移動。あとから父が仕事を終えると追いかけてきて豪華な夕食。翌日は旅館からタクシードで小学校へ。お祖父ちゃんと悦子ばあばは、そのまま一週間の逗留。

以来、二人は日本中の温泉を楽しむんだと旅行三昧。「智香と彩音、これからは世界を知らなくては駄目だ」

お祖父ちゃんの口癖だった。私と姉は、夏休みと冬休みには決まって海外に出た。お祖父ちゃんに連れられ、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリア、オーストラリア、中国、韓国、台湾、タイ、エジプト・・・

もちろん悦子ばあばも一緒だった。

私のパスポートは色とりどりのハンコで埋め尽くされている。そんなこともあって私も姉も英語に興味を持ち日常会話に苦労することなく話せるまでになった。語学塾に通った成果ではあるが、さまざまな外国人と直に触れ合えたことが大きく貢献していることは間違いない。

何事にも豪快で動じないお祖父ちゃんだったが、胆癌を宣告され、わずか三か月の闘病生活の果てに旅立ってしまった。

「大丈夫よ。覚悟はできているわ。お祖父ちゃんには感謝しかない。心配掛けることのないよう笑顔でその日を迎えるわ」

気丈なまでの笑顔で私たちに応えていた悦子ばあばではあったが、目を閉じたお祖父ちゃんに泣き崩れ、通夜も葬儀もハンカチが顔から離れることはなく、厚い鉄の扉が閉まった瞬間には人前をはばかりことなく厳粛な建物さえも揺り動かすかと思わんばかりに嗚咽が雄叫びに変わっていた。

人はこれほどまでに涙が出るものなのか。私たち家族のだけれど涙を流し、哀しみを堪えながらお祖父ちゃんを送るしかなかった。

「雅之さん。申し訳ないけれど母が心配だからしばらくこっちで暮らすわ。智香と彩音お家のことお願いね」
「そうだな、お義母さんが落ち着くまで傍にいてあげればいい」

「そうよ、悦子ばあばが心配だわ」

私も姉も父の言葉に賛同した。結果として母はお祖父ちゃんのの四十九日の法要まで深沢で暮らし、信州に帰ってきた。

「真唯まゆい、春の定期人事で部長昇進の内示があった」

「ほんと？ すごーい。おめでとう雅之さん」

「ただし、東京本社勤務なんだ・・・」

「ますます凄いじゃない。出世コース。五年後は重役ね」

母は、単純に喜びを顔に出した。

「それで・・・、この際だから皆で深沢の家に引っ越すしかないよ・・・」

父は、私たちのことを心配していた。転校ともなれば子供なりに気苦労が付きまとうことになるよ。

「平気よ、それに狭い社宅から豪邸のお嬢様になる気分よね、お姉ちゃん」

「お嬢様って・・・。確かに大きな家ではあるがお父さんの稼ぎじゃあ、お手伝いさんを雇うのは無理、無

理」

私も姉も、どちらの血筋なのか根っからのポジティブ派。確かに転校することによってこれまでのお友達と別れることに。新しい学校での環境に不安がないわけではない。でも、裏を返せば、新しいお友達や知らなかった世界が見えることへの楽しみが。それに、悦子ばあばのことが気になっていた父にしてみればとてもラッキーなことに違いない。

「じゃあ、お父さん。新学年から東京ね？」

「確かに内示では来月から東京本社勤務ということだけれど、まだ正式な辞令ではない。万が一ということもあるので・・・」

「万が一って？」

父が心配しているのは、東京本社は営業と事務仕事の総合業務が主体であって、薬の開発研究施設は無く、籍だけが東京本社で全国にある製造工場に併設された研究室の統括管理を任せられるらしいとのことだった。しかし、それがどういふことなのか私には理解できなかった。

「転校は、二学期からか、翌年の四月からか」

「そんなやり取りがあつて、私は四年年生の二学期、姉は中学一年生の二学期から深沢の学校に通うことに

なつた。もちろん、悦子ばあばが大歓迎してくれたこととは言うまでもない。門柱には悦ちゃんの姓、高尾と私たち若林の二つの表札が付けられた。

「どう、智ちゃんも彩ちゃんも新しい学校には慣れた？」

「大丈夫よ、悦子ばあば。心配しなくても。新しいお友達もできたし楽しくやっているわよ」

実際に私たちは転校して一か月も経たないうちにこれまでと何ら変わらない学校生活を送っていた。

「真唯子、ごめん。やっぱり転校は少し早かつた」

その年の暮れ、父が母に謝っている。どうやらまた転校しなければならぬ事態がおきたようだった。

「凄じくない。じゃあ、部長に昇進して一年も経たないうちに取締役常務さんつてこと」

母はいまにも小躍りしそうなまでに歓びをあらわにしている。父の心中が解らない母ではないが、どこまでもポジティブな性格の母である。

父の話によると、全国にある製薬工場に併設されている研究所は品質管理のみを残し、小田原に新たな総合研究施設を建てることになったらしい。お父さんはその総轄責任者として赴任するのだ。前々からの計画ではあつたが十年先と思われていたものが、社長の

一声で具体化されたらしい。

日曜日に家族五人が集まって会議が開かれた。もつとも父以外、誰一人として神妙な顔つきをしてはいない。

「あら、いいお話じゃない。それで向こうにはいつお引越しをするの？」

悦子はあばも父の重役昇進を飲んでくれている。

「工場用地の買収は済んでいるのですが、実際に建物を建て始めるのは来年の春、完成は翌年の夏ごろになります。それまでは行ったり来たり」

「それで、雅之さんの先々の見通しは？」

「たぶん、年齢的にも東京本社に戻ることなく研究所の責任者としてサラリーマン生活を終えることになるかと」

「わかりました。じゃあ、向こうに新しくお家を建てましょう。ここは広すぎて住むには不便。来年の春には新天地での生活を始めることにして、さっそく不動産をあたってみましょう」

話の主導権は、あきらかに悦子ばあばの手に渡っていた。

「おかあさん、不動産屋さんって？」

「この家の処分もあるし、向こうに土地を探して新し

いお家も建てなければならぬでしょ」

「それは、いくらなんでも気が早過ぎよ」

母がさも呆れたように口にする。

「そんなことはないわよ。住む家を建てるには一年は必要よ」

悦子ばあばはテーブルの上に置かれた紅茶を口に運びながら落ち着き払い、さも当然よとばかりにショートケーキにホークを入れ一口ほおばった。

「わかりました。新しい家のことはお義母さんと真唯子に任せます。環境の良いところに新しい家を建てましょう。五人住むにはそれなりの広さも必要でしょう。明日にでも銀行に行つて借り入れの相談をしてみます」

少し間があつたものの父が意を決意したかのように口を開いた。

「ちよつと待つて。私たちにも新しい家を建てるなら意見をいわせて欲しいよ。ねえ、お姉ちゃん」

「そうよね。私たちの住む家でもあるのよね」

間髪入れず、私は異を唱え、姉に同意を求めた。

「もちろん、解つてますよ。当分お休みの日は向こうに出かけて色々な情報を集めたり、見て廻りたいわね」
「賛成！」

悦子ばあばはすでに一歩先を見据えて話を進めている。私は感心しながら賛同した。もちろん母も姉もすぐさま遅れをとることなく賛同した。

我が家における歴史的な家族会議は和やかな雰囲気の中で終了し、二杯目の紅茶が湯気を立てた。我が家の女四人の力を結集したイチゴのケーキは笑顔と共に胃袋の中におさまり、テーブルには一緒に焼いたクッキーが新たに皿に盛られ、おしゃべりは続いた。

「家を建てるには先ずは駅が近いことよね」

行動派の母が口火をきった。車の免許も持ち、軽とはいえ車も所有している母ではあるが、出かける際にはもつぱら電車を利用してゐる。デパートや商店街はどこでも駅に併設されている。車より電車の方が買い物に便利だと知っているのだ。車はもつぱら私たちを運ぶ道具としての利用価値でしかなかった。

「そうよね、いずれ私たちも高校、大学となれば通学に電車は欠かせないものね」

「いくら遠くても歩いて二十分。自転車なら十分もかからないで着くところがいいわ」

私と姉が話を追いかけ、そして続ける。

「小学校、中学校は地元の学校としてスーパーには歩いて行ける距離がいいわよね」

「お使いは彩音に任せるとして、図書館だって必要よ」
「私は図書館より、おいしいパン屋さんが近くにあるといいな」

「くいしんぼうらしい発想ね。それより大きな公園が生活環境には必要よ」

「そうよね、静かで空気のきれいな所がいい。そう、これが一番よね、悦子ばあば」

私は悦子ばあばに賛同を求めた。

「そうね。彩ちゃんの言う通り。でも静かで空気がきれいとなると、駅は近いかしら、スーパーだって……。図書館や公園はありそうね。でもパン屋さんはどうかしら。私は坂が多くなければいいわね」

「そうか……。なかなか難しいわね住むところを探すって」

「今日はこれくらいにしよう。住むところはお義母さんと真唯子にまかせ、智香と彩音はどこに行っても勉強で遅れを取らないように頑張る。いいな」

「わかってるって。おかげ様で私も彩音も学年では五番以内。信州の時だって」

「大丈夫。お父さん私たちとはとってもいい子よ」

おどけながら私が応えると居間が笑いに包まれた。
「それから、雅之さん。銀行に相談することはないわ。」

お金は私が用意します。この家を手放せば地方に家を建てることぐらいいんでもないことよ。それにこの家の半分は真唯子にも権利があるのよ」

そんなやり取りがあつて、お父さんの勤務先にまで車で十五分の所に土地を購入することができ、門柱にはこれまで通り二つの表札が付けられた。そして、私たちは翌年の新学年から転校することになった。

学校も近く、小田急線にも近い。スパ―だつて大きな公園に図書館、さらにはパン屋さんまでもが徒歩で二十分の範囲に。悦子ばあばと共に足蹴く通つた成果だつた。

家族五人が新しい土地に生活の根を下ろして五年が経つた。父は研究所の総責任者として毎日頑張つてくれる。母は家のことは悦子ばあばに任せ、契約社員ではあるが役員秘書の仕事に就いた。姉は地元で一番の県立高校の二年生となり大学受験に備えながら弓道部のキャプテンとして秋のインターハイを目指して頑張つている。私は英語力をさらに磨きたいと小田急線沿いのミッションスクールを受験し二年生となった。そんな平和な家族に事件が起こつた。

「みんな聞いて。今から私をばあばと呼ばないで悦ちゃんと呼んで」

日曜日の夕食後、リビングでくつろぐ私たちに悦子ばあばが突然言い出した。

「どうしたの？ おかあさん？」

私達は一斉に悦子ばあばの顔に視線を投げた。

「どういふ心境の変化ですか？」

父が、改めて悦子ばあばの心中を探るかのように問いかけた。

「ちよつとね・・・」

悦子ばあばの顔がほころんでいる。いや紅みをおびている。まるで思春期の女の子がはにかんでいるかのようにも見える。

「悦子ばあば。今日は人形劇の練習日だつたよね」

「彩ちゃん。ばあばじゃなく悦ちゃん」

すかさず私に呼び直せとばかりにダメを押してきた。悦子ばあばは、こちらに引越して間もなく地元のボランテア「あおむしさんの会」に参加した。「あおむしさんの会」は、手作りの人形を操りながら月に一度、地元の図書館で人形劇を開催している。もちろん無料だ。対象は小さな子供とその若い親たちになる。もつとも孫を連れてのお年よりも多いらしい。最近では、病院の子供病棟や老人介護病棟などにも活動の場を広げていると聞いている。

「ごめんなさい。悦ちゃん」

「そう、そうしてね」

満足そうに笑みを浮かべながら悦子ばあば、じやないや悦ちゃんが今日の出来事を話はじめた。

あおむしさんの会は、人形劇に触れた子供たちがいつかきれいな蝶になって空を自由に飛べるようにと先代の会長さんが立ち上げた会だった。使う人形も紙芝居の箱を何倍にも大きくしたような舞台も小道具もすべてが会員の手作りできていた。悦ちゃんのデビュー作品「赤ずきんちゃん」を家族全員で観に行ったのはもう四年も前のことになる。会員のすべてが、七十、八十の元気なお年寄りたちだった。

会を立ち上げた会長さんは、八十歳の誕生日を機に会長の座を退いた。悦ちゃんがその跡を継いで会長になって半年になる。かねてからの懸案だった人形劇の舞台、あの紙芝居に使う箱のような舞台を段ボールから木製にしたいとの念願が、新しい会員、藤本浩太によって叶ったと顔をほころばした。

「藤本浩太、浩ちゃん。とっても器用なの。会員の中では一番若くて六十五歳。十人ほどの会員の中で男性は浩ちゃんを含めて三人だけれど後の二人は七十歳を過ぎていてとても大工仕事は無理。セリフだってよく

間違えるし・・・。まあ、お年寄りって感じね」

浩ちゃん？ 悦ちゃんと呼んで欲しいと言いつ出した原因はこの浩ちゃんだと私は直感した。

「これまでは、舞台の小道具も含めてなんでも段ボールで作リペンキを塗っていたけれど、弱くてよく壊れたの。浩ちゃんはそれを木で、さらに組み立て式だから運ぶのも楽だし簡単に車にも積める。見た目も立派だし大工さんが造ったみたいなの」

悦ちゃんの顔がますます緩んでいる。みんなは、クツキーを口に運びながらただ黙って聞くしかない。

「浩ちゃんがね、これまで絵本をそのまま台本にしたような人形劇ではなく、創作劇もやろうよって。脚本まで書いてくれたの。三本もよ。とっても面白いの。子供たちにもうけると思うわ。お年寄り向けのもきつと喜んでもらえると思う。まるで劇作家」

このまま、悦ちゃんの話聞いていたら深夜になっても終わりそうにない。それにポットのお湯もクツキーのお皿も空になっている。

「おかあさん、スーパーマンのような浩ちゃんのことにはよくわかりました。で、悦ちゃんと呼んで欲しいと言う理由は？」

母が悦ちゃんの話早く終わらせようとなかば呆れ

顔で口にした。

「真唯子、いいじゃないか僕はもう少し浩ちゃんの話
を聞いてみたいな」

なぜか、父は悦ちゃんの話を嬉しそうに聞いていた。
悦ちゃんがこれほどまでにはしゃぎながら話している
のを見ているのが自分のことのように楽しんでいるか
のようだ。

「ありがとう、雅之さん」

悦ちゃんは百万の味方を得たかのように父に微笑み
を返した。

「ばあ、ごめんなさい悦ちゃん。浩ちゃんつて家族
は？」

姉が初めて口を開いた。悦ちゃんのはしゃぎようは、
わかりやすいほどに誰もが浩ちゃんのが好きなん
だと思わせていた。何事にも慎重な姉は悦ちゃんの無
防備とも思える浩ちゃんへの好意が心配だったに違
ない。

「ご家族？ もちろんいるわよ。奥様と娘さんとその
お子さんの四人家族。四歳になった男の子が中心の
ご家族ね」

「そうなの。お孫さんも同居しているの？」
母が妙に安心したかのように頷くようなしぐさをし

た。

「それで、悦ちゃんつて呼ぶことになったのは？」
私はたたみかけるように話を戻した。

「私ね、浩ちゃんとお付き合ひすることにしたの」

「お付き合ひって、おかささん」

悦ちゃんのこの一言は母の顔を今にも卒倒しそうな
ほどに青ざめさせる効果があった。

「悦ちゃん、お付き合ひって不倫するってこと？」

「あら彩ちゃん、すごいこと言うのね。残念ながら浩
ちゃんはセックスの対象じゃないわ」

「お母さん。子供たちの前で変なこと言わないで」
あつけらかんと答える悦ちゃんに母の顔がこわばっ
た。

「真唯子も雅之さんも心配しないで、会での仲間とし
てのお付き合ひとは別にボーイフレンド、お茶のみ友
達としてお付き合ひしようって・・・」

「それを向こうから言ってきたの？」

母はあきらかに浩ちゃんに嫌悪感を抱いているかの
ようだ。

「違うわよ。私が浩ちゃんにお願いしたの」

「悦ちゃん、やるわね」

姉が親指を立てながら笑みを送った。悦ちゃんもそ

れに応えるかのように親指を立て何度も頷きながら笑みを返した。

高2ともなれば、姉にもボーイフレンドはいる。私も会ったことがある。なかなかのイケメンだ。ただ、残念なのは成績がイマイチらしい。文武両道の姉が一学年上の彼の勉強を見ることもあるようだ。同じ剣道部の男子部キャプテンで個人戦では全国大会にも出場するほどの腕前らしい。私が知る限りでは、まだボーイフレンドの域は超えていないようだ。が、それも時間の問題のような気がする。来年早々に彼はどこかの大学を受験し、遠くに離れることになる。きっとその時が姉の感情を大いに揺さぶることになるに違いないと私は確信している。

「それで、なぜ悦ちゃんと呼ぶことに？」

私はもう一度、問い直した。

「今日ね、人形劇会の練習のあと二人でスターバックスに寄ったの。誘ったわけでも誘われたわけでもなくなぜかそうなったの。そしてらね浩ちゃんもブラツクなの。気があうなって思ったら浩ちゃんがね」

「これから高尾さんのことを悦ちゃんと呼ぶからね。ただし二人の時だけ。会の中では高尾さん。これまで通りだ」

「いいわ、じゃあ私は浩ちゃんと呼ぶことにするわ」
「そう。使い分けることが密かな悦びにつながるし脳の活性にもいい。若さを保つ秘訣につながる。悦ちゃんは齡のわりには元氣だし女性としての色氣もまだまだ・・・」

「そう、ありがとう。でも齡のわりは余計でしょ」

「ごめん。おれとしては褒め言葉だったんだけど。悦ちゃんの色氣は若いころの職業によつて培われたと思うな」

「私の職業？」

「そう、きつと他人の視線がそそぐ中で厳しく指導される所作、たとえば銀行員。きつとそれはご主人の仕事の上でも功をなしていたと思うよ。ご主人によく言われたでしょ」

「凄いい観察力ね。いや、想像力かな？」

悦ちゃんは浩ちゃんの想像力に完全にハートを引き寄せられてしまったに違いないと私は思った。確かに悦ちゃんは短大を出て銀行員になったと聞いている。亡くなったお祖父ちゃんも、「お祖母さんは夫婦同伴のパーティーや催し物に出かけても恥をかくことなく安心して見ていられる」って、よく口にしてたことを思い出した。

「人はね、所作や歩き方にこれまでの人生の色合いが必ず出るものさ。色んな人と接していると自然にわかるようになる。仕事にも大いに役立つしね」

「そうかもしれないわね。じゃあ、浩ちゃんはエンジニア。手先も器用だし何でもよく知っているし……。会社では部長さんぐらいまでは出世できた。どう？」

「残念でした。営業畑がほとんど。いくつかの会社を経験して定年した会社に三十年近く。最後の役職は品質管理部長」

「ふーんそうなんだ」

悦ちゃんの読み筋は少し外れた。でも楽しいお茶の時間を一時間余り過ごせたと喜んでいた。

この日の悦ちゃんの話では、浩ちゃんに好意を持ったことと会の間との間に楽しみな秘め事が持てたことに大いなる喜びを感じていることが伝わってきた。何よりも色気が残っていると云われたことが事の他、嬉しかったようだ。確かにもうすぐ七十一歳の誕生日を迎えるとは思えないほどに元気なのも確かだ。悦ちゃん、浩ちゃんと呼び合うことでさらに若さを保とうとの強い思いからだと知った。

悦ちゃんのお父さんはお寺の住職さんでもあり町の助役さんでもあったと母から聞いている。今と違って

厳しくしつけられて育ったに違いない。社長夫人としての生活。若いころはきつと美人だったと思わせる面影も残っている。なによりも証拠にそのDNAを引き継いだ母も姉も私も美人である。

「智香も彩音も早くお風呂呂に入って勉強しなさい」
母が不機嫌そうにしている。その理由はよく判らない。きつと悦ちゃんが心配なのに違いない。

その夜、十一時過ぎに喉が渴いた私は勉強の途中でキッチンに行こうと階段を降りた。リビングの扉は閉まっていたがガラス越しに両親が話しているのが見えた。「お母さん甲斐もなく恋でもしているかのようにはいやいで。浩ちゃんとかいう人大丈夫なのかしら」

「おれはお義母さんってすごいと思うよ。知らない土地にきてても人形劇をやったり友達も多い。近所付き合いだってうまいし。なによりも余生を謳歌している」
「余生だなんて。お母さんが聞いたら怒り出しそうなくらい青春真つただ中の感じよね」

「確かに……」

「ねえ、あなたからそれとなく浩ちゃんっていう人に深入りしないように言ってくれない」

「大丈夫だよ。お義母さんは大人だよ。それに人格だつて。おれたちがとやかく言うことじゃないさ」

「そうかもしれないけれど・・・。お金を貸して欲しいだとか、こんな投資話があるとか・・・」

「それこそ心配はいらないさ。深沢で暮らしていた人なんだから。その手の話はいっぱいあったさ。だけど騙されたとか、失敗したとかなんて聞いたことなかっただろう？ その手のことには自然に嗅覚が働くものさ」

「そうよね・・・」

言葉とはうらはらに母の心配が収まったようには私には見えなかった。

「さあ、もう寝ようよ」

父が腰をあげたと思われる椅子の音が聞こえた。私は慌てて階段を駆け上がった。

それから二週間ほどして、夕飯の食卓に珍しい物が添えられた。

「悦ちゃん東京に行ってきたの？」

「いいえ、どうして？」

「だって卵の花にごぼうのお漬物。デパートに行ったんじゃないの？」

これまでもまれに出来合と思われる惣菜が食卓に添えられる時があった。お土産だったりデパートの地下や催しだったり。いずれにしても悦ちゃんや母さが

この手の惣菜を作ることはなかった。

「これね、浩ちゃんが作ったの」

悦ちゃんは嬉しそうに話してくれた。

「こんなの悦ちゃん家じゃ作らないでしょ。久し振りに作ったからおすそ分けって」

浩ちゃんはお料理もできるらしい。お正月のおせちも自分で作るんだとか。私にはすごいとしか言いようがない。

「今日、お父さんは」

「もう、帰って来るころよ」

我が家の夕食は毎日七時半と決まっている。母の勤め先は車で十五分くらいだから六時には帰宅できる。

私たちも部活の練習があっても七時過ぎには家に着く。父もよほどのことがない限り夕飯に間に合うように帰ってこられる。朝食も夕飯も出来る限り家族全員が揃ってと父が決めた。

今週の当番は悦ちゃんだ。母の献立は父を中心に決められるが、悦ちゃんは私とお姉ちゃんを優先してくれる。同居するようになってずっとそうだった。だから週の初めの献立はカレーライスと決まっていた。

だが、今日の食卓に香辛料の匂いは漂っていない。豊富な野菜サラダがボールに盛られている以外は純和

風と言つていい。

「悦ちゃん、今日はカレーじゃないんだ」

別に不満があるわけではないが、何気なく聞いてみた。

「ただいまー」

姉が部活から帰ってきた。お父さんも一緒だ。

「お義母さん、今日はカレーじゃないんですね」

父がキッチンに入ってきた。

「雅之さん、お仕事お疲れさま」

父が帰って来る車の音で母はどんな時でも手を止めて玄関先で出迎える。父は台所か居間をのぞき、悦ちゃんと帰宅を知らせる。毎日の日課となっている。夫婦としても、婿と義母それぞれにとつていい関係を保つための秘訣なのかもしれない。

「あれ、お義母さん東京に出かけてましたんですか？」

父がテーブルの上に置かれた惣菜を見つけて口にした。と、同時に姉が着替えを済ませてキッチンにやってきた。

「今日、カレーじゃないんだ。うんっ、悦ちゃん今日は東京にお出かけたの？」

テーブルの上に置かれた小鉢を見つけてのことであることは容易に察しがつく。

「我が家はみんなして同じことを聞くのね」

私は呆れると同時に悦ちゃんとの五人家族がこの上ないほどの幸せな家庭を形成していると実感した。

「さあ、みんなテーブルについて。今日の食卓の話題は料理人としての浩ちゃんについてよ。そうよね、悦ちゃん」

わたしはみんなをテーブルにつかせ話したくてウズウズしているであろう悦ちゃんの方を見て微笑みを送った。悦ちゃんと呼ぶようになって夕食での話題に浩ちゃんの名前が出ない日はない。

「いただきます」

全員が声を揃える。

「雅之さんどうぞ」

悦ちゃんが卵の花の小鉢を父に促す。母、姉、私、悦ちゃんの順に、取箸を使って自分の皿に乗せてから口に運んだ。

「おいしい！」

思わず私の口を突いて出た。

「なかなかのものね」

母が続いて卵の花の出来栄えを褒めた。

「デパートの地下のよりも色んな具材が入っているし味もしっかりしてる」

姉も浩ちゃんの腕前を讚えた。

「ごぼうもおいしいよ。ゴマの風味も聞いている」

父が真つ先にごぼうに箸をのぼして口にした。悦ちやんの顔はほころびつばなした。

「浩ちゃんね、お酒が好きなの。毎晩欠かしたことがないんだって。だから酒のつまみはぜーんぶ自分でつくるんだって。そのときついでに夕飯も翌日のお弁当のおかずも」

「じゃあ、奥さんは？」

「浩ちゃん家はね、前にも話した通り奥さんと娘さんとお孫さん。四歳になる男の子の四大家族。仕事をしていないのは浩ちゃんとお孫さんのね。だから夕飯は自然に浩ちゃんを作るの。お孫さんが口にする食材や味付けにはかなりの気遣いをしているって感じね」

悦ちちゃんの話はこれだけでは終わらなかつた。会の集まりでの出来事の数々に必ず浩ちゃんの活躍ぶりや紹介が付け加えられた。

「毎日、毎日、浩ちゃん、浩ちゃんってお母さんにも参るわね。年甲斐もなく、まるで初恋の人にでも巡り合えたって感じでウキウキ」

「いいじゃないか。それに、確かに近頃若返ってきたって気がする。元気でいられる源の浩ちゃんに感謝し

てもいいんじゃないかな」

「そうかもしれないけれど・・・。服装だつて近頃じやジーンズにスニーカー」

父と母が悦ちちゃんがお風呂に入っている隙をみながらひそひそと。確かに悦ちちゃんの服装が巢鴨ファッションから新宿ファッションへと変化した気がする。

「私も思う。悦ちちゃんの雰囲気、若くなった。何よりも浩ちゃんの話をする時の嬉しそうな顔。あれはボーフレンド以上ね」

「へんなこと言わないで」

わたしの正直な感想に母がいきり立った。いや、動揺しているといった方が正解かもしれない。母だつて悦ちちゃんが若さをいつまでも保ち、元気に明るく振舞ってくれた方が嬉しいに決まっていると思う。だからと言って近所の噂になるようなことがおきても困ると思つているに違いない。

「私も彩音と同じ。昨日なんて、私のデニムのショーツパンツを貸してつて。いくつか試着しては姿見に映してはしゃいでいたわよ」

「うそつ」

母の顔はムンクの叫びと化した。

「私はそれくらい勇気をもつてもいいかなつて思う」

けど」

「やめて、お母さんはもうすぐ七十一になるのよ。近所の手前だって・・・」

常識派の母には老婆のシヨートパンツ姿を想像しただけで寒気が走るのかもしれない。何をもって常識というのか私にはよく判らないが、姉のシヨートパンツはさすがにやり過ぎのような気がする。盛り上がったお尻と、白くきめの細かい太腿を大胆に見せることで若さを強調するファッション。わたしはシヨートパンツをそう理解している。

「だいじょうぶよ。心配しないで。私だってそれくらい心得ているわよ。ちよつと着てみたかっただけ」
お風呂から出た悦ちゃんが、髪をバスタオルで拭きながらリビングにやってきた。

母は悦ちゃんのDNAを多分に受け継いでいる。物事を計る物差しの加減も母と悦ちゃんとはよく意見が合う。大きく違うのは悦ちゃんは超の着くほどにポジティブな面を時として私たちに見せる。「くよくよしたって始まらないわよ。明るく明るく振舞って」悦ちゃんの口癖だ。

「若林さん家のおばあちゃん、近頃ちよつとおかしいんじゃない？　なんて噂話は勘弁してよ、お母さん」
母の真顔に悦ちゃんよりも父が反応した。

「真唯子、それはお義母さんに失礼だよ。確かにシヨートパンツはいくらなんでもと思わないわけじゃないが、それをはいて出かけるぐらいの勇氣がお義母さんにも真唯子にもあつていいと思うな。若さを保つどころかぐつと若返るんじゃないかな」

「あなた、お母さんをおおらないで。シヨートパンツなんてわたしだって気恥ずかしくてはけないわよ」

お母さんの顔が戦闘モードに入りかけている。

「そうかな。真唯子も昔はよくはいていたじゃないか。眩しとさえ思えたな。もう子供たちも大きくなつたんだし、いいと思うよ」

父の口ぶりは、母のパンツ姿を懐かしんでいるかにも見えた。と同時に、眩しかったは母に対する最高の賛辞だと思う。

「そうよ、私はともかく真唯子はそれぐらいの勇氣を持ちなさい。私の血を引いて白い肌と長く健康的な足なんだから」

母の顔はいつしか休戦モードに変わり紅らんでいる。その週末、久しぶりに家族五人で東京に出かけた。

いくつかのデパートを廻り、それぞれがシヨートパンツとそれに合う上着を買って求めた。もつとも悦ちゃんのパンツは太ももが隠れる丈ではあつたが若々しさを強調するには充分な輝きを放つていた。上着についてはあれこれと迷ったあげく、みんなが大きめのTシ

ヤツを選んだ。悦ちゃんが選んだのは、白地にカラフルな花がちりばめられていた。

「悦ちゃん。Tシャツ、男物も買ったでしょ。赤いリボンのラッピングまでして。浩ちゃんへのプレゼントト？」

「あら、彩ちゃんよく見てるわね。そうよ。浩ちゃんね、来週お誕生日なの」

悦ちゃんは恥じらうことなく応えた。

「だいじょうぶなの？」

わたしは少し心配になった。Tシャツをプレゼントしてくれるってどういうことなの？ きつと、奥さんも娘さんも不思議がると思う。

「あら、そう。でも、もう買っちゃったしね」

ポジテブなものもここまでくると困りものかもしれない。ただのボーイフレンド。特別ではあるかもしれないがたんなるお茶のみ友達。悦ちゃんはそのつもりでも周りはそうは見えてくれない。わたしにはそう思えてしかたがない。

翌日、そんなことを気にするでもなく悦ちゃんは、大きくひざの出たショートパンツとTシャツを着て浩ちゃんとおしゃべりをするのだとスターバックスに出かけた。もちろんリボンの付いた包みを忘れてはいない。

「彩音、お母さんは？」

母が悦ちゃんを探している。何かを頼みたいようだ。

「今、出かけたよ。浩ちゃんとスターバックスだって」

「スターバックス？」

「浩ちゃんが車でお迎えにきたみたいよ。嬉しそうにスマホを覗いていた」

「ふーん」

三時間ほどして悦ちゃんが大きな袋を抱えて帰ってきた。

「大荷物ね、なあにそれ？」

「いま、袋から出すから彩ちゃん手伝って」

わたしは悦ちゃんにいわれるままに大きな袋の口を広げた。

「すごいじゃない」

袋を広げると同時に心地よい花の香りが私を包むかのように漂った。私は目を閉じ、その香りを楽しんだ。

そしてゆつくりと袋の中を覗き見た。袋の中には大きなアレンジフラワーが入っている。

「どう？　すごいでしょ」

色とりどりのガーベラと紫色のデンファレにピンク色をした八重のトルコ桔梗。可憐さを際立たせるかのようにかすみ草がポリウム感を出している。そして中央に真紅のバラが一本、何かを誇張しているかのような存在感を示している。

「どうしたの？　こんな大きなお花、我が家で観るの

は何年ぶり？」

「この家を新築した際に敏子ばあば（父方の祖母）がお祝いにと送って来た時以来これほどの花を見たことはない。それにしても悦ちゃんの浮かれかたには超の字がいくつもつくかのようだ。」

「浩ちゃんがね、私の誕生日のお祝いにつて。男の人にお花をもらうなんてお祖父ちゃんから結婚する前にプレゼントされたつきり・・・」

悦ちゃんの顔つきは、お祖父ちゃんを懐かしんでいようすなどまったく感じられない。視線も心もどこかを浮遊しているとしか思えない。

「おかあさん居る？ 明日の・・・。どうしたのこのお花？」

リビングにやってきた母の目が点になった。

「私への誕生日祝い。どう、ステキでしょ。浩ちゃんからよ」

母は何か言いたげだったが無理やり呑み込んだようだった。

「お母さん、明日の当番代わってくれない？」

「あら、どこかお出かけ？」

「ええ、七時に食事会が入ったの」

どうやら明日の炊事当番が会社の都合でできなくなつたようだ。パーティの立場ではあつても役員秘書ともなればなかなか断れないことも多いと嬉しそうに愚痴

をこぼす母。秘書課の打ち合わせが時々近在のレストランや小料理屋で行われる。季節ごとに変わる旬の素材の情報集めと確認を目的としたものらしい。もちろん無給ではあるが役得もいいところである。

「いいわよ。ゆっくり楽しんできて」

「楽しむつて、仕事ですよ、仕事。それより、お母さんのお誕生日つて来週よね。」

「そうよ、9月の6日」

「お母さん七十一歳よね」

「そうよ、でもおかげ様でまだまだ若いわ。気持ち乙女つていったところかな」

「二、三日前に自治会から敬老会の案内が来ていたけど見た？」

「来月の中旬中、浩ちゃんが鎌倉に出かけないかつて誘ってくれたの」

悦ちゃんと母の会話がかみ合っていないが、わざとらしく思えてならない。

「へえっ。浩ちゃんと鎌倉にデート？」

わたしは二人に分け入るかのようにな、あえて口にした。

「あら。デートだなんて、そんなじゃないわよ。報国寺の竹林を観ながらお抹茶をつて」

「よかった。お歳相応で」

「そんなことはないわ。若いカップルでにぎわつてい

るのよ」

悦ちゃんはどこまでもすまし顔で応える。母はいら立ちを隠そうとしているのか視線が泳いでいる。

「悦ちゃん、デートするの？」

姉がリビングに入ってきた。

「智ちゃん、早いお帰りね。東京じゃなかったの？」

姉は、今年の春に東京の大学に進学した剣道部の先輩と半年ぶりのデートだといって十時過ぎには出かけて行った。まだお昼の三時前だ。

「逢えなかったの？ ドタキャン？」

悦ちゃんが姉のようすを気に掛けた。

テーブルに置かれた花に反応を示すでもない姉のようすは少し変なようにも見えるが落ち込んでいないようでもない。

「ランチを一緒に食べただけで帰ってきたの」

そういうと姉は自分の部屋に上がっていった。

「どうしたのかしらね。喧嘩でもしたのかしら？」

「帰りが遅くなるよりは、いいんじゃないの」

悦ちゃんが姉を気に掛け、母が安心したかのように口にする。私は昨晚の母と父の会話を思い出していた。

「あなた。明日、智香がデートだって」

「ふーん、いいじゃないか。相手は剣道部の先輩だった彼か？」

「みたいね。半年ぶりに会うらしいわ」

「彼はたしか東京の大学でアパートで独り暮らしだったよな？ 大学はどこだっけ？」

「M大学の経済学部」

「M大？ 聞かない大学だな」

「大学なんてどこだっけいいわよ。それより帰りが遅くなると心配じゃない」

「親が心配したっけしようがないよ。智香も十八だ、自分で責任のある行動ができる歳さ」

「あなたは、男親なのにずいぶん冷静ね。気にならないの？ 間違いがあつてからでは遅いのよ」

どうやら母は姉のロストバージンを心配しているらしい。さすがに私の周りにはいないが、高3ともなるとそうでもない。姉のクラスにも少数派ではあるが経験者がいると聞いている。父が出張の時にケーキを食べながら女四人でそんな話になったことがある。

「あなたたちは間違いを起こさないでね」

母が最後に口にした言葉だった。はつきりとは口にしていないだけで「結婚式を挙げるまでとは言わないまでも結婚すると決めた男以外とはセックスはだめよ」と言っているのも同じであることは容易にわかる。

私は知っている。父と母も婚前交渉があつたことを。二人だけで京都に旅行をしたことを。同じホテルに二泊。婚約をする一年まえだった。二度目は金沢での一

泊旅行。この時に兼六園で父は母にプロポーズをしたのだ。その三か月後に結婚式を挙げた。すでに姉は母のおなかの中で小さな鼓動を打っていた。夜遅くに二人でお酒を呑みながら話をしていてのを何度か聞いている。ほろ酔いで楽しそうに思いつ話をしていてる父も母も私は好きだ。私もいつかこんな夫婦になればとさえ思う。悦ちゃんとお祖父ちゃんも同じだ。よく二人の出会ったころの思いつ話を聞かされた。

「お姉ちゃん、いい？」

わたしは温かい紅茶とクッキーを持って姉の部屋のドアをノックした。

「先輩と何かあったの？」

「悦ちゃんでしょ、紅茶を入れたの」

さすがに姉の勘は冴えている。確かに母がいなくなつたときに悦ちゃんが、「それとなく話相手になつてあげて」と耳打ちしてきたのだった。

「どうもしないわよ、彼とはもう二度と会うことはないわ。あいつはただの男よ。どこにでも居るただの男」

「どういうこと？」

あれほどウキウキして出掛けたのに、姉の心はすっかり冷めてしまっている。

「バイトのお金が入ったからって言いながら吉野家に

入ろうとするのよ。デリカシーが無いよ。あの男」

姉は思い出したかのように憤慨している。

「ランチが吉野家じゃあ凍り付くわよね」

「でしょ。だから私がおごるからと言ってイタリアンに変更。高校生の私がおごるのよ」

「それから」

「それから、渋谷公園を散歩したら人目がないところでキスしてきたの。初体験」

「えっ、お姉ちゃん初めてだったの？」

「前に一度してきたことがあったけど、その時はうまくすり抜けて・・・でも、今日は周りがカップルばかりだったこともあって」

「それで、どうだった」

「少しはうつとりもしたかな。心臓もドキドキ。でもあとが腹立つ。それも超」

姉はかなりのオカシムリだ。

姉が言うには、キッスのあと耳元で「おれの部屋にこないか？」と誘ってきた。それも下心見え見えだったとか。「男くさい部屋はいやだ」と姉が断ると「じゃあ、ホテルへ行こう」と。これに姉がキレた。半年ぶりのデートのランチは吉野家でもホテルに行くお金は持っているのかと。

「最低の男。二度と会うことはないわ。初キッスにうつとりした自分が悲しい」

持つて行ったクッキーのほとんどを姉が食べた。テーブルには飛び散ったカスが・・・。

話を聞き終えた私は、空になったお皿とカップをお盆に乗せ立ち上がった。

「彩音、わかってるわよね」

姉が、念を押してきた。姉妹だから心を許して何もかもを話すことがままある。この手の話は特にだ。父にも母にも、悦ちゃんにさえ漏らすことはない。暗黙の掟なのだ。

「だいじようぶ」

わたしは、ウインクをして部屋を出た。

「どうだった？」

悦ちゃんがすかさず聞いてきた。

「ランチが吉野家だったらしい。幻滅したって」

「そう、」

悦ちゃんもそれ以上は聞いてはこない。心得ているのだ。

それから何日かして、悦ちゃんが浩ちゃんを鎌倉に出かけた。あのTシャツとショートパンツにスニーカーを履いて。浩ちゃんは悦ちゃんが贈ったTシャツを

着てくるらしい。小学生が遠足に行くみたいにはしゃいでいた。何日も前から天気予報を見ながら。

「悦ちゃん。どうだった、鎌倉？」

その日の夕食時。いつもなら聞いて欲しいとばかりに私にサインを送ってくるのにやけに静かな悦ちゃん。いつまで待っても話を切り出さない悦ちゃんに私が問いかけた。

「素敵な竹林だったし。心も落ち着く。お抹茶もおいしかったわ。なにかも日本人ならでわね」

悦ちゃんの言葉にはずみがない。いつもならほころび顔で目を輝かせて話が続けるのに。

「それで」

わたしはあえて話を続けてとの意味を込めた。

「あとは少しお散歩してお昼にんぶらを食べて・・・」

また、話が途切れた。わたしはあえてそれ以上を聞かなかった。

「智香、勉強の方はどうだ」

気を使った父が話題を変えた。

「心配しないで。あと半年を切った。一発で合格してみせるわよ」

「さすが智ちゃんね。頑張つて。でも無理はだめよ」

「ありがとう、悦ちゃん」

夕食が終わり、姉は早々に自分の部屋へと消えた。母と悦ちゃんにはキッチンで後片付け。父とわたしはリビングでテレビのスイッチを入れる。

「あなた、お風呂に入って」

母に促されて父が腰を上げる。

「彩音、あなたも来年は受験よ。智香と同じ高校を受けるんですよ。お父さんがお風呂からでたら彩音が入って自分の部屋に行きなさい。智香に声を掛けてね」
私の学力をもってすれば難関ではない。だからといって手は抜かない。姉も私もそこはよく似ている。DNAのなせる技なのかもしれない。
わたしはお風呂から出ると姉に声を掛け、髪をバスタオルで拭きながら悦ちゃんの部屋をノックした。

「彩ちゃんね、どうぞ」

悦ちゃんは、ノックの仕方では訪問者を聞き分ける。

「悦ちゃん、鎌倉どうだったの？ 浩ちゃんと喧嘩でもした？」

様子のおかしかった悦ちゃんに私はストレートに聞いかけた。

「かなわないわね、彩ちゃんには」

おばあちゃん子でもあったわたしは悦ちゃんとは何でもストレートに話をしてきた。父や母には話しく

いことでも悦ちゃんには話せた。いや、聞いてもらうことで心を軽くしてきた。

「もう、特別なお茶のみ友達はやめにしたんでしょ？」

「そうよ。よく判るわね」

悦ちゃんはある程度あつげらんとした顔つきで答えた。そして話を続けた。

「浩ちゃんがね、てんぷらを食べたあと鎌倉を散策したら急にキスをしてきたの」

「やるわね」

「茶化さないの。そりゃあ、わたしも忘れていた女心に火が付く思いでついつい応じちゃった。ドキドキもしたし嬉しくもあったわよ」

「それで」

わたしは身を乗り出すかのようにその続きをせかした。

「でもね、わたしは浩ちゃんにそんなことは望んでいないの。そりゃあ浩ちゃん、お祖父ちゃんには無いものをいっぱい持つてはいるけど男を期待しているわけじゃないの」

「でもキスされて嬉しかったんでしょ？」

「ええ、でもね……。同時に、なんだどこにでもいる男かって思えたの」

「嬉しさと同時に冷めてしまったってこと？」

「そういうことね」

「女心は複雑ね」

結果として悦ちゃんは浩ちゃんとは人形劇の会員の一人としてこれからも仲良く付き合っっては行くが二人きりで会うことはやめたと口にした。何日か前に姉から聞いた話とよく似ている。

まだ誰にも話してはいないが私にもボーイフレンドができた。悦ちゃんか姉に話したくてしようがないほどに気分が舞い上がっている。しかし、家族には覚られないようにと今は一生懸命に抑えている。限界に近づきつつある気がするものの、姉にも悦ちゃんにも話すのはもう少し先に延ばすことにした。

完